



2隻の漁船が近づくにつれ、網にかかった魚が上げる水しぶきの音が大きくなっていく。この日は大量のタチウオが捕れた



富山
from TOYAMA

伝統漁法で スリランカ漁業の再生を

ブリやホタルイカ、白エビなど海の幸の宝庫として知られる富山湾で400年にわたり受け継がれてきた「越中式定置網漁」。この富山生まれの漁法が今2004年の津波被害で打撃を受けたスリランカの漁村に大きな力をもたらそうとしている。

「天然のいけす」を生んだ 自然に優しい漁法

「セーの、ヨイショー」
深夜2時半。暗闇の中に煌々と光る漁船のライトに照らされ、男たちが威勢の良い掛け声とともに一斉に網を巻き上げる。
年の瀬も迫った2010年12月下旬、富山県富山市の四方漁港から3キロほど離れた沖合の定置網漁場。この時期の富山湾にしては波は穏やかだが、ほおに吹き付ける風は刺すように冷たい。
平行に並んだ2隻の中型漁船が、仕掛けてあった網を両側から挟み込み、ゆっくりと網を巻き取っていく。それに合わせて、始めは30メートルほど離れていた船が、いつの間にか数メートルほどにまで近づいていた。網の底が水面に迫るにつれ、魚が無数の水しぶきを上げる。

「いくぞーっ！」

合図に合わせて大きなすくい網が投げ入れられ、大量のタチウオがクレーンで引き上げられる。そして閉じられた網の口が開くと、甲板はね回るタチウオであつという間に覆い尽くされた。

「天然のいけす」と呼ばれ、海の幸の宝庫として知られる富山湾。ブリ、ホタルイカ、白エビを筆頭に、湾内で水揚げされる魚介類は年間300種以上に上る。その多くは「越中式定置網漁」で捕れたものだ。

400年も前からこの富山湾で脈々と受け継がれてきた定置網漁は、魚の習性をうまく利用した自然に優しい漁法として有名。海流に沿った魚の通り道に網を仕掛け、そこに侵入してきた魚を無理なく確保する。魚をなるべく傷付けず生きたまま水揚げでき、見た目も美しく新鮮だ。また、網目の大きさを調節することで捕獲量をコントロールできるため、乱獲を

津波、そして海面上昇 スリランカ漁村の悲劇

30人近い漁師の中に、慣れた手つきで作業をこなす4人のスリランカ人の姿があった。富山が誇る定置網漁を同国に伝えるJICAの草の根技術協力事業「スリランカ南部州アンバラングダにおける省資源型定置網漁業の導入による漁村活性化支援事業」の一環で2010年10月に来日した彼ら。約2カ月にわたり、毎晩のように漁師たちと海に出ている。

「初めて見る漁法で最初は勝手が分からず大変でしたが、2カ月間で作業にもだいぶ慣れました。ただ、この寒さは相変わらずこたえます（笑）」

そう話すのは、スリランカ南部の漁村アンバラングダで代々漁師を続けるシルバさん親子。アンバラングダは、04年12月に発生したインドネシア・スマトラ島沖地震による津波で大きな被害を負った地域だ。「多くの漁業関係者が犠牲となり、生き残った人々の多くも船や網を波にのまれて生活の基盤を失ってしまいました」（父・ガミニさん）。



アンバラングダ漁協組合の会長でもある漁師のガミニさん。村を代表して研修に参加した彼の、漁業再生にかける思いは人一倍強い

※魚が好んで群集する水面下の岩場。



(左)「そっちのかごを取ってくれ!」「早くしろ!」。甲板ではね回る魚を素早く選別し、かごに仕分けていく。鮮度を守るため、船上には怒号にも近い掛け声が飛び交う
(右)富山湾で利用している典型的な定置網の模型。その大半が沿岸から2~4キロの沖合、水深10~100メートルの海中に設置され、大きさは、最大長さ600メートル、幅100メートルにもなる



完成した定置網をコンテナに詰め、研修員。この「富山からの贈り物」が、スリランカの漁業再生のカギを握る

「はるか頭上の木の枝に、流れてきたゴミが引っ掛かっていて、津波の激しさを物語っていました。海岸では大きな船がまっぶたつに壊れて打ち上げられ、漁師たちもただぼう然として……。とにかくひどい惨状だった」

試練はそれだけにとどまらなかった。温暖化のせいも、漁獲量の減少が続いていたほか、海面上昇対策として沿岸一帯に設置した護



重しを用意する大垣漁業の漁師たち。この石が魚礁を作り出し、新たに豊かな海の生態系を生む

毎晩、操舵席から漁を指揮する大垣漁業有限会社の浦上秀雄専務も、05年3月、「スリランカを助きたい」と現地視察を企画した地元議員に声をかけられ、富山市の漁協組合長として同行。その際に見た光景を今も鮮明に覚えている。

「はるか頭上の木の枝に、流れてきたゴミが引っ掛かっていて、津波の激しさを物語っていました。海岸では大きな船がまっぶたつに壊れて打ち上げられ、漁師たちもただぼう然として……。とにかくひどい惨状だった」

試練はそれだけにとどまらなかった。温暖化のせいも、漁獲量の減少が続いていたほか、海面上昇対策として沿岸一帯に設置した護

岸ブロックが原因で、これまで主流だった地引網漁が難しくなったという。

これまで50年間、漁師一筋の人生を歩んできた浦上さん。自身も台風で網を引きちぎられ、大きな損害を被った経験があるだけに、同じ海の男たちが味わう痛みにいたたまれない気持ちになった。ショックを受けて帰国した後、浦上さんは知人の福本誠さんから現地の津波被害者を支援するために設立したNPO法人「地球の夢」に参加。以来、約5年にわたって定期的に現地を訪れ、生活支援物資の配給などで被災地を回りながら、スリランカの漁業再生の可能性を探ってきた。

「そしてたどり着いたのが、富山の定置網漁だった」と、「地球の夢」の代表を務める福本さんは言う。

「定置網漁は水産資源の枯渇も防ぐことができ、地引網漁に代わる漁法として十分いけると思いました。魚礁ができて魚も戻ってきますから。また、比較的陸地の近くに定置網を設置するので、船の燃料費も安く抑えられるというメリットもあります」

富山の誇りを先人の知恵を

年末に帰国した研修員を追うようにして1月下旬、浦上さんは現地に向かった。富山での研修中、「地球の夢」や地域の漁業関係者らの協力で材料を調達し、研修員が自ら編んで完成させた定置網を、実際にアンバラングダの沖合に設置するため。まさに、遠い海に向こうからのエールが込められた、大切な「贈り物」だ。

「地球の夢」では今後、浦上さんが2012年まで定期的にアンバラングダを訪れ、現地の人々が自力で定置網漁を実践できるように、段階的に技術指導を行っている。

深夜2時の出港ハードな研修の日々

「ほら、そこはもっとたくさん石を詰めて」と

漁の後、漁港近くの作業場で、浦上さんが研修員に付きっきりで指導に当たっていた。この日の研修内容は、網を海底に固定する「重し」の作り方。50キロほどの重さになるまで、袋一つ一つに大きな石を詰めていく。「補修や管理も含めて最初から最後まで全部自分たちでできるように、必要な技術・知識はこの研修ですべて伝えます」と浦上さんの指導にも熱が入る。

研修員の1日はハードだ。毎日深夜2時に出港し、明け方に漁から戻ると、水揚げ、魚の仕分け、朝のせりの準備を行う。朝食を挟んだ後、定置網の作り方や修繕の



方法、浮きや重りの設置の仕方、魚の衛生管理手法など、さまざまなテーマでの実習や講義が夕方まで続く。休日は漁がない日曜日のみ。それでも皆、疲れも見せず研修に励んでいた。

休憩時間を惜しんで作業を続けていたガンガ・エディリシンゲさんは、「定置網漁はとても合理的。スリランカではまだ例がありませんが、自分たちが持ち帰って技術を広めることで、人々の生計向上

定置網の編み方を教える漁師歴50年の浦上さん(左から3人目)。漁が終わった後も、資機材の保守や管理方法などについて付きっきりで指導してきた。2005年に津波の惨状を直接目にして以来、「途上国の漁業を救いたい」と「地球の夢」の活動にも精力的に取り組む



アンバラングダの漁村。かつては魚が豊富に捕れたが、津波の被害に加え、水産資源の減少や護岸ブロックの影響で、漁獲量が減り続けている

く。特にスリランカは年中暑いので、捕った魚の鮮度の保持技術は力を入れて伝えていく予定だ。当面の目標は、アンバラングダで定置網漁を普及・定着させ、漁民の収入を向上させること。そしてその経験をもとに、定置網実行委員会を中心として、スリランカのより多くの沿岸地域へと定置網漁を広げていく。

現在、富山湾の漁獲量の実に7割が定置網漁によるもの。しかし、かつては大型漁船で大量に捕る方法と比較され、「時代遅れ」「待ちの漁法」と揶揄されていた時代もあったという。それでも、その価値を知る先人たちが苦勞と改良を重ねながら受け継いできたこの漁法は、乱獲や海洋汚染などで水産資源の持続的な利用が脅かされ

つある今だからこそ、資源管理型の漁法として世界からも注目を集めるようになった。02年には、富山県内でも特に定置網漁が盛んな氷見市で「世界定置網サミット」が開催され、これをきっかけに、氷見市がJICAの草の根技術協力事業でタイやインドネシアへの技術移転に取り組むなど、富山の定置網漁は他国でも広がりを見せている。

「なんとしても成功させにやいかん。責任重大です」

まったく新しい漁法を教えるという大仕事に、浦上さんの胸は高ぶる。伝統漁法を受け継いできた多くの先人たちの思いと、富山が生んだ生粋の漁師としての誇りが、きっと、大きな力となってスリランカの海に届くに違いない。

富山に到着し、地元メディアの取材を受けるガンガさん(左)とガミニさん。連日、研修の様子が報道されるなど、富山の伝統漁法を生かした国際協力には地元の人々の大きな注目と期待が集まっている

